みんゆう随想

山に魅せられて（16）

渡辺　裕之

福島市・渡辺エンジニアリング代表取締役

日高山脈奥地の静まり返った山荘では、寝袋に入っても寒さを感じ、沢音と本降りになった雨音が、不気味に静けさを増し、安眠できず一夜を過ごした。

早朝ヘッドライトを頼りに沢を覗くと、昨日の倍以上の水量で流れも強くなり、天気が回復するまで足止めが心配になった。空を見ながら暫く待ったが止む気配が無い。雨脚が強くなれば水は短時間で到達し、たちまち濁流になってしまう。シャトルバスの時間に間に合わないと、更に数時間の林道歩きとなり「進むも地獄、引くも地獄」。苦渋の決断で早めの出発と時間をかけて慎重に下ることを選択し仕度を急いだ。

昨日とは環境が一転して命がけの下山コースとなった。下流に進むに従って川幅は広く、水嵩が増し、地下足袋はすっぽり隠れ、水深は徐々に膝を上下し、ついに真ん中の凸起まで到達したが、緊張のあまり感覚は鈍い。ストックで念入りに深さと川底を探り、流れに沿って蟹さん歩きを繰り返し、終点に到着したときは気力が抜け、ザックの重量がズッシリと戻ってきた。

バス停までの林道では、昨日のカラス1羽が待っていた。カーと鳴きながら私の行く手を小刻みに飛び枝に留まるので、その都度、路肩にお菓子を置きながら進むと、やがてカラスは急に態度を変えて戻ってしまった。予感的中、カラスの利口さに騙されたことを悟ったが、愉快さが先立ち2時間の林道歩きも終わり幌尻岳に別れを告げた。

北海道一周の山旅前日に社員の代表から餞別を貰ったので、お目当ての夕張メロンを送るため、一旦高速を降りた。破綻した街とは想像もつかない賑わいのなか、手際よく会社、恩師、友人に高級メロンを送り、北海道最後の山「羊蹄山」へ移動を開始した。

道の駅「230ルスツ」でキャンパー泊まり。雨音を聞きながらロマンチックな一夜を過ごし、京極登山口を朝6時に出発した。雨は上がったが好天は期待できず、泥んこの登山道をひたすら登ると、7合目付近で岳樺のなかで数羽のウグイが、求愛なのか、縄張り争いなのか。鳴き声に勇気を貰って高低差1500㍍を登り切って岩場の山頂に立つと、一瞬霧が晴れてお鉢の全容を見せてくれた。運の良い晴れ男。

百名山達成と云う高年夫婦を祝福し、決意を新たに焦らず登山口へ向かった。